



Title	チュクチ語における使役について : 強制の度合いの差異と形態統語的ふるまいの相関性
Author(s)	呉人, 徳司
Citation	北方言語研究, 9, 1-12
Issue Date	2019-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/88219
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73729
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_kurebito_tokusu.pdf



チュクチ語における使役について —強制の度合いの差異と形態統語的ふるまいの相関性—¹

呉 人 徳 司

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

キーワード：チュクチ語、使役、逆使役、強制の度合い、逆受動

1. はじめに

本稿では、チュクチ語（チュクチ・カムチャツカ語族）²において使役を形成するいくつかの形態統語的方法が、強制の度合いの差異化と関係していることを論じる。筆者は、チュクチ語の動詞の結合価の増減にかかわる操作を扱った呉人 (2009) において、チュクチ語の使役動詞には、①助動詞と共に分析的に作られるもの、②自動詞から他動詞を派生するのに使われるのと同じ接辞から作られるもの、③もともとは「作る」という動詞的な概念を表わす語彙的接辞から作られるものなどがあることを記述している。また、これらは使役の強制の度合いにおいて差異がある可能性を指摘している。すなわち、使役派生に用いられる接辞の種類によって、意志を無視した「強制」の意味合いをもつ場合と、被使役者の意志を尊重する意味合いをもつ場合という違いが生じるとしている。

本稿では、この指摘をさらに掘り下げ、その後の聞き取り調査で収集したデータで補強し分析する。具体的には、それらの方法が強制の度合いの違いに応じて使い分けられていること、そのような違いを表わすのに、結合価の増減の操作、いかえれば、どの名詞項を前景化しどの名詞項を背景化するかかの操作が、重要な役割を果たしていることを論じる。

チュクチ語の使役に関する先行研究 (Inenlikej et al. 1969; Skorik 1977; Nedyalkov 1979; Dunn 1999) では、使役接辞についての記述はきわめて簡単で、使役の範囲も必ずしも明確に定められていない。本稿が考察対象とする、いくつかの使役接辞が持っている強制の度合いの差異化という機能についての指摘は、筆者の知る限りこれまで全くない。

本稿では、自他対応と使役の相関関係と①～③の使役について呉人 (2009) に基づき概観した上で、①～③のうち、先行研究では触れられなかった③の語彙的接辞に焦点をあて、この接辞による使役が逆受動化し、構文的には自動詞文でありながら、意味的・機能的には一種の使役表現となっているという珍しい現象について論じる。これは、逆受動化により被使役者を背景化するという情報構造上の操作が、使役の度合いの差異化に利用さ

1 本稿で論じるチュクチ語の使役構造に関する新たな知見は、2018 年 8 月に筆者がモスクワ州で行なった現地調査において得たものである。調査は日本学術振興会科学研究補助金（基盤研究(B)「北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究」15H05155）によって行なわれた。コンサルタントとしては、モスクワ州在住の Alla Petrovna 氏（1943 年、チュクチ自治管区アナディリ地区クラスニナ村生まれ、女性、75 歳）に協力していただいた。

2 チュクチ語はチュクチ・カムチャツカ語族に属し、アジア大陸の北東端（ロシア連邦）に位置するチュコト半島およびその周辺地域で話されている言語である。チュクチ語の音素には、短母音 /i, e, a, o, u, ə/, 長母音 /ii, ee, aa, oo, uu/, 子音 /p, t, k, q, ʔ, s, ɣ, w, j, r, l, m, n, ŋ/がある。

れているというチュクチ語の特徴を示すものだといえる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第 2 節では、チュクチ語の動詞の形態的自他対応のうち、使役とかかわる自動詞から他動詞への派生と、他動詞から自動詞への派生について概観する。第 3 節では、使役を派生する手段を概観したうえで、③の語彙的接辞から派生された使役動詞について詳述する。

2. チュクチ語の動詞の自・他の派生関係

チュクチ語における使役接辞のあるものは、自動詞と他動詞の間の派生に関わり、動詞が取り得る名詞項を増減する。これは動詞の他動性と使役性が密接な関係にあることを示している。そこで、まず、呉人 (2009) にもとづき、自動詞と他動詞の派生関係について説明する。

自動詞と他動詞の形態的対応には主に、(1) 自動詞と他動詞が同形語幹（いわゆる *labile verb*）であるもの（e.g. *mle* 「折れる、折る」、*winret* 「助かる、助ける」）、(2) 自動詞語幹から他動詞語幹が派生されるもの（e.g. *eret* 「落ちる」→ *r-eret* 「落とす」）、(3) 他動詞語幹から自動詞語幹が派生されるもの（e.g. *pela* 「残す」→ *pela-t* 「残る」）、(4) 共通語根から自動詞・他動詞それぞれの語幹が派生されるもの（e.g. *sim-et* 「壊れる」→ *r-sim-aw* 「壊す」）などが認められる。以下では、このうち使役動詞の派生と関係する自動詞から他動詞の派生と他動詞から自動詞の派生に絞って説明する。

2.1 自動詞語幹から他動詞語幹への派生

自動詞語幹に接頭辞 *r-*、接周辞 *re-...-et / -at*, *re-...-ew / -aw*, *r-...-ŋet/-ŋat*³ が付加されることにより、対応する他動詞語幹が派生される。これによって動詞がとる名詞項は一つ増える。

自動詞		他動詞	
<i>pirq</i>	「曲がる」	<i>r-pirq</i>	「曲げる」
<i>eret</i>	「落ちる」	<i>r-eret</i>	「落とす」
<i>went</i>	「開く」	<i>r-went-et</i>	「開ける」
<i>tlw</i>	「焼ける」	<i>r-tlw-et</i>	「焼く」
<i>piŋku</i>	「消える」	<i>r-piŋku-ew</i>	「消す」
<i>pawyo</i>	「揺れる」	<i>r-pawyo-w</i>	「揺るがす」
<i>ŋpe</i>	「降りる」	<i>r-ŋpe-ŋet</i>	「降ろす」

チュクチ語では動詞の活用変化により、自動詞か他動詞かの区別がなされる。すなわち、主語のみが標示されれば自動詞、主語と目的語が標示されれば他動詞である。自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同じ格（絶対格）をとるのに対して、他動詞文の主語が異なった格をとる典型的な能格構造をもつ言語である。ただし、チュクチ語には能格を示す特別な形式がなく、具格がこの機能を兼ねている。以下の例では (1a) と (2a) が自動詞文、(1b)

³ どの自動詞語幹に接頭辞または接周辞が付加されるかについては、今のところわかっていない。

と (2b) が他動詞文である。

- (1a) ott-ə-lyən pirq-ə-γʔi-Ø
 棒-E-ABS.SG 曲がる-E-3SG.SB-PST
 「棒が曲がった」

- (1b) t-ə-n-pirq-γʔen-Ø⁴ ott-ə-lyən
 1SG.SB-E-TRNZ-曲がる-3SG.OB-PST 棒-E-ABS.SG
 「私は棒を曲げた」

- (2a) penjoly-ə-n piŋku-γʔi-Ø
 焚火-E-ABS.SG 消える-3SG.SB-PST
 「焚火が消えた」

- (2b) t-ə-n-piŋku-k-wʔen-Ø penjoly-ə-n
 1SG.SB-E-TRNZ-消える-TRNZ-3SG.OB-PST 焚火-E-ABS.SG
 「私は焚火を消した」

2. 2 他動詞語幹から自動詞語幹への派生

あまり生産的ではないが、他動詞語幹に接尾辞 *-et* が付加されることにより自動詞語幹が派生されることがある。いわゆる逆使役 (anticausative) で、これにより動詞がとる名詞項が一つ減る。呉人 (2009) では、*pela* 「残す」、*tejwəŋ* 「分ける」の2語だけが挙げられているが、その後 *ejp* 「閉める」、*qetw* 「刺す」が新たに確認された。

他動詞		自動詞	
<i>pela</i>	「残す」	<i>pela-et</i>	「残る」
<i>tejwəŋ</i>	「分ける」	<i>tejwəŋ-et</i>	「分かれる」
<i>ejp</i>	「閉める」	<i>ejp-et</i>	「閉まる」
<i>qetw</i>	「刺す」	<i>qetw-et</i>	「刺さる」

次の (3a) と (4a) は他動詞文、(3b)と(4b) は逆使役によって派生された対応する自動詞文である。

- (3a) əlly-e pela-nen-Ø ŋelwəl-Ø
 父-ERG 残す-3SG.SB/3SG.OB-PST トナカイの群れ-ABS.SG
 「父はトナカイの群れを残した」

⁴ チュクチ語では、語頭に *r* がくる動詞語幹の前に形態素が接続する際、*r* は *n* に交替する。

(3b) $\eta elwəl-\emptyset$ $pela-t-\gamma?e-\emptyset$
 トナカイの群れ-ABS.SG 残す-INTRNZ-3SG.SB-PST
 「トナカイの群れが残った」

(4a) $t-ejp-\gamma?en-\emptyset$ $qeryəs\gamma-\emptyset-n$
 1SG.SB-閉める-3SG.OB-PST 窓-E-ABS.SG
 「私は窓を閉めた」

(4b) $qeryəs\gamma-\emptyset-n$ $ejp-et-\gamma?i-\emptyset$
 窓-E-ABS.SG 閉める-INTRNZ-3SG.SB-PST
 「窓が閉まった」

3. 動詞の使役

チュクチ語では、使役を派生するのにいくつかの方法が用いられているが、これらは使役の強制の度合いによって使い分けられている。まず、最も強制の度合いが強いのは、 $-j\gamma ut$ という接尾辞を動詞語幹に付加し、かつ助動詞 $rət$ 「する」をとともなう分析的な使役文である。強制の度合いにおいて中立的なのは、自動詞語幹から他動詞を派生するのに用いられるのと同様の接周辞 $r\ldots-et/-at$, $r\ldots-ew/-aw$, $r\ldots-\eta et/-\eta at$ の付加により派生される使役動詞、またそれほど生産的ではないが、他動詞語幹に接周辞 $r\ldots-\eta et/-\eta at$ の付加による使役動詞、もともと「作る」という動詞的意味を表わす語彙的接辞 $te-/ta\ldots-\eta$ から派生される使役動詞である。この他にまた、自他のペアをなす異根動詞からも使役動詞が派生される。強制の度合いが弱く、被使役者の意思を尊重する意味合いが込められるのは、語彙的接辞 $te-/ta\ldots-\eta$ から派生した使役動詞語幹にさらに逆受動接頭辞 $ine-$ が付加された逆受動文である。以下、それぞれの具体例を見ていく。

3.1 強制の度合いが高い使役動詞

使役派生接辞 $-j\gamma ut/-j\gamma ot$ は、自動詞語幹、他動詞語幹いずれにも付加される。この接辞が用いられる際には、助動詞 $rət$ と組み合わせることにより分析的な使役動詞が派生される。 $-j\gamma ut/-j\gamma ot$ が付加された動詞自体は屈折変化をせず、助動詞 $rət$ が屈折変化する。動詞語幹に $-j\gamma ut/-j\gamma ot$ が付加された使役動詞には、被使役者の意思には配慮しない強制的な使役の意味合いが込められる。ちなみに、コンサルタントはこれをロシア語に訳す際、 $zastavit$ 「強いる」という動詞を用いている。

自動詞		使役動詞		
jet	「来る」	$jet-j\gamma ut$	$rət$	「来させる」
$jəlqet$	「寝る」	$jəlqet-j\gamma ut$	$rət$	「寝させる」
$qametwa$	「食べる」	$qametwa-j\gamma ot$	$rət$	「食べさせる」
$wak?o$	「座る」	$wak?o-j\gamma ot$	$rət$	「座らせる」

- (5) ekək-Ø jəlqet-ə-jyut t-ə-nt-ə-γ?en-Ø⁵
 息子-ABS.SG 寝る-E-CAUS 1SG.SB-E-AUX-E-3SG.OB-PST
 「私は息子を（むりやり）寝かせた」

- (6) əlly-e nenenə-Ø qametwa-jyot rən-nin-Ø
 父-ERG 子供-ABS.SG 食べる-CAUS AUX-3SG.SB/3SG.OB-PST
 「父は子供を（むりやり）食べさせた」

-jyut/-jyot を他動詞語幹に付加して、3 項動詞の使役動詞を派生することも可能である。

他動詞		使役動詞		
ru	「食べる」	ru-jyut	rət	「食べさせる」
kur	「買う」	kur-jyut	rət	「買わせる」
rint	「投げる」	rint-jyut	rət	「投げさせる」
jəme	「吊す」	jəme-jyot	rət	「吊させる」
swi	「切る」	swi-jyut	rət	「切らせる」
rpiŋkuw	「消す」	rpiŋkuw-jyut	rət	「消させる」

ただし、同じ 3 項動詞といっても、動詞によりその統語関係は相互に異なる場合があるが、今のところその原因は分かっていない。以下の 2 つの例を比較されたい。

- (7) əllʔa-ta jəme-jyot rən-nin-Ø ŋaakka-γtə qoratʔol-Ø
 母-ERG 吊す-CAUS AUX-3SG.SB/3SG.OB-PST 娘-DAT トナカイ肉-ABS.SG
 「母が娘にトナカイ肉を吊させた」

- (8) ekək-Ø ru-jyut t-ə-nt-ə-γ?en-Ø kawkaw-a
 息子-ABS.SG 食べる-CAUS 1SG.SB-E-AUX-3SG.OB-PST 揚げパン-INST
 「私は息子に揚げパンを食べさせた」

(7) では、直接目的語 qoratʔol「トナカイ肉」が絶対格、間接目的語 ŋaakka「娘」が与格をとっているが、一方、(8)では、直接目的語 kawkaw「揚げパン」が具格をとり、間接目的語 ekək「息子」が絶対格をとっている。

3. 2 強制的度合いのニュートラルな使役動詞

3. 2. 1 自動詞からの使役動詞の派生

対応する他動詞を持たない、いわゆる無対の自動詞語幹に r-...-et/-at, r-...-ew/-aw が付加されると、動詞が取り得る名詞項が一つ増え、使役動詞が派生される。

⁵ nt は rət の異形態である。

自動詞		使役動詞	
tkiw	「泊まる」	r-tkiw-et	「泊ませる」
?ir	「渡る」	r-?ir-et	「渡らせる」
rayt	「帰宅する」	r-rayt-at	「帰宅させる」
wak?o	「座る」	r-wak?o-aw	「座らせる」
yərel	「吐く」	r-yərel-ew	「吐かせる」

次の例では、(9a) と (10a) は自動詞文、(9b) と (10b) は使役文である。

(9a) q-ə-wak?o-ye

IMPR-E-座る.2SG.SB

「あなたは座りなさい」

(9b) q-ə-n-wak?o-k-wən

ekək-Ø

IMPR-E-CAUS-座る-CAUS-2SG.SB/3SG.OB 息子-ABS.SG

「あなたは息子を座らせなさい」

(10a) tekisy-ə-n qit-y?i-Ø

生肉-E-ABS.SG 凍る-3SG.SB-PST

「生肉が凍った」

(10b) tekisy-ə-n q-ə-n-qit-et-yən

生肉-E-ABS.SG IMPR-E-CAUS-凍る-CAUS-2SG.SB/3SG.OB

「あなたは生肉を凍らせなさい」

3. 2. 2 他動詞からの使役動詞の派生

Dunn (1999:211) は、他動詞から使役動詞が派生されることはないとしているが、上記の二つに比べるとそれほど生産的ではないとはいえ、他動詞語幹（2 項動詞）に接周辞 r-...-ŋet/-ŋat を付加することにより、3 項動詞の使役動詞を派生することが可能である。

他動詞		使役動詞	
jp	「着る、被る」	r-jp-ŋat	「着させる、被らせる」
l?u	「会う、見る」	r-l?u-ŋet	「会わせる、見させる」
ket?o	「思い出す」	r-ket?o-ŋat	「思い出させる」
yala	「通過する」	r-yala-ŋat	「通過させる」
paa	「止める」	r-paa-ŋat	「止めさせる」
loo	「吸う」	r-loo-ŋat	「吸わせる」
ru	「食べる」	r-ru-ŋet	「食べさせる」
pl	「飲む」	r-pl-ŋet	「飲ませる」

次の例では、(11a) と(12a) は他動詞文、(11b) と (12b) は使役文である。

- (11a) t-ə-lʔu-γʔen-Ø tumγətum-Ø
 1SG.SB-E-会う-3SG.OB-PST 友人-ABS.SG
 「私は友人に会った」
- (11b) t-ə-n-lʔu-ηet-γʔen-Ø ekək-Ø tomy-etə
 1SG.SB-E-CAUS-E-会う-CAUS-3SG.OB-PST 子供-ABS.SG 友人-DAT
 「私は息子を友人に会わせた」
- (12a) nenene-te loo-nen-Ø əllʔa-Ø
 赤ちゃん-ERG 吸う-3SG.SB/3SG.OB-PST 母-ABS.SG
 「赤ちゃんは母（のおっぱい）を吸った」
- (12b) əllʔa-ta r-ə-loo-ηan-nen-Ø⁶ nenənə-Ø
 母-ERG CAUS-E-吸う-CAUS-2SG.SB/3SG/OB 赤ちゃん-ABS.SG
 「母は赤ちゃんに（おっぱいを）吸わせた」

ところで、Nedyalkov and Silnitsky (1973:16) は、類型論的な観点から他動詞に使役接辞が付加され、3項動詞を派生することは、あまり生産的ではないが、‘see -- show’, ‘remember -- remind’のような「抽象的な行為」、‘eat -- feed’, ‘drink -- give to drink’のような「食物の摂取」を表わす他動詞であれば、使役動詞を派生することが多くの言語に見られると指摘している。チュクチ語における他動詞から使役動詞の派生の例は、Nedyalkov and Silnitsky (1973) の主張を裏付けているだけでなく、「抽象的な行為」、「食物の摂取」を表わす他動詞以外の「着せる」、「通過させる」、「止めさせる」といった他動詞から派生された使役動詞があることを示している。

3. 2. 3 自他のペアの異根動詞からの使役の派生

チュクチ語では、一部の自動詞と他動詞は、相互に派生関係がない異根により区別される、一種の補充法が認められる。

自動詞		他動詞	
ikwisi	「飲む」	pl	「(～を) 飲む」
uwi	「茹でる」	əpat	「(～を) 茹でる」
yrʔo	「産む」	jto	「(～を) 産む」

自動詞語幹と他動詞語幹が異根として対応している場合には、自動詞語幹に接辞をつけ

⁶ -ηat が-ηan になっているのは、逆行同化によるものである。

て、意味的に対応する他動詞を派生させることは不可能（例えば、自動詞 *qametwa* 「食べる」に接辞を付加して、意味的に対応する他動詞を派生させることは不可能）だが、一方、使役動詞を派生させることは可能である。自・他のペアをなす異根動詞から派生される 2 つの使役動詞は、それぞれがとる名詞項の数が異なる。すなわち、自動詞から派生された使役動詞は 2 項動詞であるのに対し、他動詞から派生された使役動詞は 3 項動詞である。例えば *ikwisi* 「飲む」(自動詞) と *pl* 「飲む」(他動詞) からそれぞれ派生される使役動詞 *r-ikwisi-w* 「飲ませる」と *r-pl-ŋet* 「飲ませる」による次の例 (13a) と (13b) を比較されたい。

- (13a) *əlʔa-ta* *ekək-Ø* *r-ikwisi-w-nin-Ø*
 母-ERG 息子-ABS.SG CAUS-飲む-CAUS-3SG.SB/3SG.OB-PST
 「母は息子に飲ませた」

- (13b) *əlʔa-ta* *ekək-Ø* *r-ə-pl-ə-ŋen-nin-Ø*
 母-ERG 息子-ABS.SG CAUS-E-飲む-E-CAUS-3SG.SB/3SG.OB-PST
nəminəm-Ø
 スープ-ABS.SG
 「母は息子にスープを飲ませた」

3. 2. 4 語彙的接辞

使役の派生接周辞 *te-/ta-...-ŋ* は、本来、「作る」を意味する語彙的接辞である（例えば、*te-li-ŋ* 「ミトンを作る」、*ta-ra-ŋ* 「家を作る」）。この接周辞は「作る」という他動詞的意味を表わすが、次の (14) で見るように、自動詞活用する。

- (14) *əlʔa-Ø* *t-irʔ-ə-ŋ-ʔi-Ø*
 母-ABS.SG 作る-毛皮の上着-E-作る-3SG.SB-PST
 「母は毛皮の上着を作った」

この *te-/ta-...-ŋ* について詳しくは Kurebito (2001) を参考されたい。

この *te-/ta-...-ŋ* はまた、無対の自動詞語幹から使役動詞を派生する場合にも用いられる。この使役の作り方は、先行研究では言及されていない。ちなみに、Moreno (1993)によれば、ロマンス諸語、英語、テルグ語、インドネシア語、タミル語など多くの言語で、英語の *make* 同様の「作る」を意味する自立動詞が使役を表わす統語的な用法を発達させている。チュクチ語では、自立動詞ではなく、語彙的接辞が使役形成に関わっている点が独特である。

*te-/ta-...-ŋ*により使役動詞を派生する際には、動詞語幹に直接付加することはできない。まず、他動詞化接頭辞 *r*-を接続した動詞語幹が派生され、その語幹に付加される。

自動詞		使役動詞	
<i>jet</i>	「来る」	<i>te-r-jet-ŋ</i>	「来させる」
<i>puture</i>	「踊る」	<i>te-r-puture-ŋ</i>	「踊らせる」

lqut	「立つ」	te-r-lqut-ŋ	「立たせる」
jlqet	「寝る」	te-r-jlqet-ŋ	「寝かせる」
kətyntat	「走る」	ta-r-kətyntat-ŋ	「走らせる」

次の (15) と (16) では、それぞれ lqut 「立つ」と jet 「来る」にまず、r- が付加され、他動詞化し、その後に使役接辞 te-...-ŋ が付加されている。

- (15) əllʔa-ta ekək-Ø te-n-ə-lqun-ŋ-ə-nin-Ø
 母-ERG 息子-ABS.SG CAUS-TRNZ-E-立つ-CAUS-E-3GS.SB/3SG.OB-PST
 「母が息子を立たせた」

- (16) ekək-Ø t-ə-te-n-jen-ŋ-ə-γʔen-Ø
 息子-ERG 1SG.SB-E-CAUS-TRNZ-来る-CAUS-E-3SG.OB-PST
 「私は息子を来させた」

3.3 強制の度合いが弱い使役動詞：逆受動文

チュクチ語には、接頭辞 ine-/ena- などにより他動詞文を自動詞化する、いわゆる「逆受動」現象が見られるが、この逆受動化接辞も使役形成に関わっている。逆受動化接辞にはこの他に -tku/-tko- があるが、これは使役を形成する際には利用されない。その理由は、現時点では不明である。語彙的接周辞 te-/ta-...-ŋ から派生される使役動詞にこの逆受動化接頭辞が付加されることがある。すなわち、自動詞語幹に、接周辞 te-/ta-...-ŋ が付加されることにより派生された使役動詞語幹に、さらに逆受動を表わす ine-/ena- が付加されると、逆使役動詞が派生される。ただし、逆使役動詞は自動詞語幹に直接付加されるのではなく、まずは r- の付加により、他動詞化のプロセスを経た後に派生されるのである。

この t-ine-/t-ena-...-ŋ による使役動詞には、前述の -jyut/-jyot による分析的使役動詞のように強制的な意味合いは含まれず、被使役者の意志を尊重する意味合いが込められる。ちなみに、コンサルタントはこれをロシア語に訳す際、zastavit' 「強いる」という動詞は用いず、なかなかロシア語には訳しづらいがあえて訳すならば、poprosit' 「お願いする」のような意味であると説明している。

自動詞		逆受動動詞	
tipʔejne	「歌う」	t-ine-r-tipʔejne-ŋ	「歌うように促す」
uwi	「煮る」	t-ine-r-uwi-ŋ	「煮るように促す」
lejew	「歩く」	t-ine-r-lejew-ŋ	「歩くように促す」
lqet	「行く」	t-ine-r-lqet-ŋ	「行くように促す」

- (17) əllγ-ə-n akka-γtə t-ine-n-lejew-ŋ-ə-rkən ŋaryəno-γtə
 父-E-ABS 息子-DAT CAUS-AP-TRNZ-歩く-E-CAUS-E-PRES 外-DAT
 「父が息子に外に歩いていくように促している」

(18) t-a-t-ine-n-jəlqen-ŋ-a-y?ek-Ø

akka-ytə

1SG.SB-E-CAUS-AP-TRNZ-寝る-CAUS-E-1SG.SB-PST 息子-DAT

「私が息子を寝るように促した」

(18) は、(5) と異なり逆受動構文ではあるが、意味的・機能的には使役表現になっている。また、被使役者は与格に降格する。(5) と違って、「私」が「息子」に対して、「むりやり寝かせる」のではなく、「寝るように促す」という被使役者の意思を尊重する意味合いが含まれている。逆受動化にともない被使役者が与格に降格し、情報構造的に背景化することが、強制の意味が薄められていることと相関するのではないかと考えられる。

このように、構文的には逆受動文すなわち自動詞文でありながら、意味的・機能的には一種の使役表現になっているのは、チュクチ語の大きな特徴であるといえる。さらに、逆受動化により被使役者を背景化する情報構造上の操作が、使役の度合いの差異化のために利用されている点も、チュクチ語の特徴であるといえよう。

4. おわりに

本稿では、チュクチ語において使役が複数の方法で形成されることに着目し、それぞれの方法の形態統語的ふるまい、意味・機能を分析した。その結果、次のことが明らかになった。

1) チュクチ語の使役は主に以下の方法によって作られる。

①動詞語幹に使役派生接辞を付加し、助動詞とともに分析的に表わす。

②自動詞から他動詞を派生するのに使われるのと同じいくつかの接辞によって表わす。

③ももとは「作る」という動詞的な概念を表わす語彙的接辞によって表わす。

2) ①は被使役者の意思に配慮しない強制的なニュアンスの使役であるのに対し、②③は強制の度合いに関しては中立的である。

3) ③の語彙的接辞によって作られる使役は、さらに逆受動接頭辞を付加した逆受動文、すなわち、自動詞文に転換することが可能である（これを④とする）。すなわち、構文的には逆受動文（自動詞文）でありながら、使役の意味を表わすという類型論的に珍しいふるまいをするのである。被使役者名詞は、逆受動化接辞がつかない対応する使役文では絶対格で表わされるのに対し、逆受動化にともない与格に降格して表わされる。このような逆受動文は、①②③と異なり、「～をするように促す」というような、被使役者の意思に配慮した使役の意味を表わす。このことは、被使役者名詞が斜格で表わされることによって情報構造上、背景化されることと無関係ではないと考えられる。

4) 以上から、チュクチ語では、強制の度合いの強い使役から弱い使役へと、①>②③>④のように階層化しており、これが構文的な違いによって区別されていると考えられる。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ABS: absolutive, AP: antipassive, AUX: auxiliary verb, CAUS: causative, DAT: dative, E: epenthesis, ERG: ergative, IMPR: imperative, INSTR: instrumental, INTRNZ: intransitivizer, LOC: locative, OB: object, PRES: present tense, PST: past

tense, SB: subject, SG: singular, TRNZ: transitivizer

参考文献

- Aoki, Haruo (1968) Toward a typology of vowel harmony. *International Journal of American Linguistics* (34)2: 142-145.
- Comrie, Bernard (1992) Causative. In Bright, William (ed.) *International Encyclopedia of Linguistics*, New York/Oxford: Oxford University Press, 231-233.
- Comrie, Bernard & Maria Polinsky (eds.) (1993) *Causatives and transitivity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Dunn, Michael John (1999) *A grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy, Australian National University.
- Inenlikej, P. I., V. P. Nedjalkov & A. A. Xolodovič (1969) Kauzativ v čukotskom jazyke. In A. A. Xolodovič (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij: Morfologičeskij kauzativ*, Leningrad, 260-270.
- Koptjevskaja-Tamm, Maria & Irina A. Muravyova (1993) Alutor causatives, noun incorporation, and the mirror principle. In B. Comrie & M. Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, Amsterdam /Philadelphia: John Benjamins, 287-313.
- Kozinsky, I. Š., V. P. Nedjalkov & M. S. Polinskaja (1988) Antipassive in Chukchee: oblique object, object incorporation, zero object. In M. Shibatani (ed.) *Passive and Voice*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 651-706.
- 呉人徳司 (1997)「チュクチ語の自動詞・他動詞の形態的対応」. 宮岡伯人・津曲敏郎(編)『環北太平洋の諸言語』第3号, 京都大学大学院文学研究科, 97-112.
- Kurebito, Tokusu (2001) On lexical affixes in Chukchi. In Osahito Miyaoka and Fubito Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim*, Volume 6, Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University, 65-83.
- Kurebito, Tokusu (2008) Valency-changing in Chukchi. In Tokusu Kurebito (ed.) *Linguistic Typology of the North*, Vol.1, Research Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 73-86.
- 呉人徳司 (2009)「チュクチ語の結合価の変更について」『アジア・アフリカの言語と言語学』4: 111-132.
- Moreno, J. C. (1993) 'Make' and the semantic origins of causativity: a typological study. In B. Comrie & M. Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 155-164.
- Nedjalkov, V. P. and G. G. Silnitsky (1973) The typology of morphological and lexical causatives. In F. Kiefer (ed.) *Trends in Soviet theoretical linguistics*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1-13.
- Skorik, P. Ja. (1977) *Grammatika čukotskogo jazyka II*, Leningrad.

On the Chukchi Causative:
Correlation between the Difference in Degree of Causation and Morphosyntactic Behavior

Tokusu KUREBITO
(ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

In this paper, we shall focus on the different ways the causative is formed in the Chukchi language and analyze the meanings and functions that represent the morphosyntactic behavior of each variation of the causative. In Chukchi, according to the type of affix used to derive the causative verb, there will be a resulting meaning indicating that there is either respect for the will of the subject or a sense of "compulsion" and ignoring of the will of the subject.

The morphological causative can be formed transitively or intransitively by affixing the circumfixes *r-...-et/-at*, *r-...-ew/-aw*, *r-...-ŋet/-ŋat*. The degree of the causative verb derived by adding these affixes is neutral. The analytic causative construction involves the combination of the causative suffix *-jyut/-jyot* to the main verb and using the auxiliary verb *rət*. The causative verb derived from the addition of *-jyut/-jyot* to an intransitive verb stem implies compulsion. The causative can also be formed with the circumfix *te-...-ŋ* which has a lexical meaning 'to make', but is etymologically unrelated to the free-standing verb (e.g. *te-li-ŋ* 'to make mittens', *te-kʔeli-ŋ* 'to make a cap'). The use of this circumfix as a causative marker is semantically parallel to the English analytic causative 'make' and French 'faire'. However, this circumfix cannot be directly affixed to a transitive verb stem. *te-...-ŋ* must be added after the transitive prefix *r-* is first added to the intransitive verb stem (e.g. *wakʔo* 'sit down' vs. *te-r-wakʔo-ŋ* 'make to sit down', *jlqet* 'sleep' vs. *te-r-jlqet-ŋ* 'make to sit down'). It is interesting to note that the antipassive marker *ine-/ena-* and the causative marker *te-...-ŋ* are affixed to the intransitive verb stem. This antipassive functions causatively but is not as strong as the normal causative.

(くれびと・とくす tugusk@aa.tufs.ac.jp)